「日本近代史と台湾——批判精神の欠如について」

戴　国　煇

きのうの飛行機で日本に帰ってきたというか、戻ってきたというか。日本に四十一年間お邪魔しまして、昨年の五月に立教大学を定年を一年前に繰り上げて台湾に帰りました。今度は台湾から、少し距離をもった形で、日本の大きな変化と日本人のものの考え方を見てきたんです。きょうお呼びいただいたのは、恐らく台湾からの発言を期待されてのことだろうと思います。

日本が明治政府、近代国家成立後最初に海外出兵したのは、一八七四年のいわゆる台湾への出兵です。それから五十万両の賠償金を獲得して、ある意味では日本の皆様に失礼な言い方になりますが、戦争によってお金をかせぐという日本の習性が、そこから始まったと思います。日清戦争はそこから二十年経って、明治二七年、二八年におこりました。それも大変な賠償金を取って、台湾を植民地化します。近代国家というのは、今にしてみればおかしな話で、日本は敗戦後、植民地もみんな元に戻してしまったわけですが、それにもかかわらず、これだけの経済大国になった。だから、かつてのものの考え方というのは、極めていんち

きだったということです。植民地がなくても自助努力で、もちろんその中にはアメリカとの関係とか、いろいろな複雑な問題がありますけれども、植民地経営がなくても日本の資本主義はこんな形で展開してきたのです。したがって日本が近代国家として出兵し、さらに植民地支配の経験を積んだ台湾での五十年間とは何だったのか、もちろんその途中で韓国併合をやり、「満州国」建国をやるわけですが、台湾というのは、本来なら日本の近代を根元的にその意味を問うという意味で、あるいは原理的に問い直すためには大変に大事な場所であるけれども、そのことを取り上げた研究は日本でほとんどされておりませんでした。

農業経済から台湾研究へ

私は、もともとは農業経済を勉強していたのですが、そのうちにだんだんはまっていって、こういった発言をしないと日本の皆さんに大変迷惑をかけるのではないかと思うようになった。その場合の私の論理は何かというと、日本では後藤新平に対する評価が非常に高いんです。後藤新平は最初十年間、台湾で経営して、その後に満鉄経営に移るわけです。だから短期的に見ると、後藤新平の経営というのは日本にとっては勲章ものだと。だけれども実はもう少し長期的な射程でいうと、二つの原爆を食らったのは、後藤新平が植えつけた罪ではないか。その罪をもたらしたのは実は私の祖先、要するに台湾の人々の抵抗運動が弱かったからだというものです。

日本に対して十分反省を促すことができなかった。だから、後藤新平をはじめ、台湾というのは踏みつけやすい、台湾の支那人は踏みつけやすいと思うようになった。台湾における支那人というのは面子を重んじ、お金に汚く、もう一つはむちに弱いと。考えてみると、やはり台湾の連中は逃げ場がないわけです。あの島で

すから、いくら頑張っても殺されて殺されて、しかも殺された話は歴史の流れの中で薄められていくわけです。だから、朝鮮半島で悪いことをしたという意識はあっても、台湾ではいいことばかりしたと思い込んでいる日本人がたくさんいるんです。

それで、私が仁井田陞先生の還暦記念論文集に、台湾の鉄道を敷いたのは日本人ではないのだと、清末の台湾における鉄道敷設運動がおこって、中国人自身がそれを敷いて、その後に日本が入ってきて、それをより近代的に発展させたと。それをめぐって、私がうそを書いているという批判があったんです。それで、私はしようがないから、日本人が編集した台湾鉄道史は二～三冊ありますが、それを出して、私が中国の資料を出さなくても、日本人がこういう記録を書いているんですよ、といったのです。だけど、そういうふうに日本人はいつのまにか思い込んでしまうんです。

批判精神の欠如

それで私は、昭和三〇年に来て、昭和三一年に東大の大学院に入って、異常な雰囲気に出会いました。矢内原忠雄先生のブームです。そろそろ落ち目だったんですが、ちょうど総長をしていた時で、矢内原批判というのはタブーなんです。矢内原先生というのは『帝国主義化の台湾』を書いて、それは名著に違いありません。しかし、いかに名著であっても、学問というのは時代の制約を受けるわけです。だから、それを絶対化したらアウトなんです。社会科学として絶対化したら、ノーなんです。それはマルクスでもスターリンでもレーニンでも同じです。

ところが日本の学会では、矢内原先生の批判を私が東大でやったら変な目で見る人がいて、私が台湾から来た国民党の特務ではないかという悪いうわさまで出るんです。それが今度は一転して、司馬遼太郎が『台

湾紀行』を書きました。今度は司馬さんと私は、二回ほど一緒に講演しましたけれども、司馬さんは国民的作家といいますか、先ほど小島先生が徳富蘇峰のことをいわれましたけれども、本来的には徳富蘇峰の戦争中のあの協力、あの体質を司馬さんは持っているんです。

しかし、司馬さんというのはものすごいベストセラー作家で、それで今度は無批判状況が日本にはあります。台湾もまた司馬さんを大歓迎なんです、有名ですから。私だけが司馬さんを批判したものを書いたり講演したりすると、今度は私が悪者になるわけです。本来的にいうと、社会科学というのは批判がなくては価値がないはずです。ところが、日本の社会科学というのは不思議なところで、それが非常に少ない。ただ、最近は幸いなことに、『現代思想』九月号に田村さんという若い人が果敢に司馬さんを日本の内側から批判しているので、私はほっとしているのです。そうでなかったら、司馬さんのああいう内容が、韓国、あるいは、中国紀行を含めて、かなりの影響力を持つとすると、いつか来た道に日本はもう一回迷い込む可能性が十分あると思います。

そういう意味で、台湾的状況というのを、私は台湾出身の中国人として申しわけないと思っています。というのは、私の親しい日本の友人の中にこんな人がいます。いやあ、戴先生、韓国に行くと毎日のように韓国人にがんがん批判されるけれども、台湾に来たらごちそうになるし、本当に親切で台湾はいいですよと。それを聞いたときに、いや、困ったなあと。親しい大学の先生で、人間的にはわかります。ところが、実は中国人というのは理解しにくいんですね。リップサービスがうまくて、社交的で、お客さんが好きで、だけどそれをそのまま受け取ったら困るんです。日本というのはやはり大国ですから、これから二十一世紀に移るときに、日本人としてはっきりとした政治哲学を

持ってほしいんです。そうでないとひどいことになるんです。そういう意味でやはり私は、台湾というのは本来的には台湾側からちゃんとした司馬遼太郎批判があってしかるべきだし、日本の台湾植民地支配というのは何であったかと、本当はちゃんとしたことをやらないといけないのです。

中国のプラグマティズム（功利主義）

率直にいって、中国人というのは非常にプラグマティックです。つまり、功利主義です。例えば、つい最近『日本経済新聞』をお読みの方ならおわかりだと思うんですが、台湾には大変な海運の王様（張栄発）がいます。エバ・グリーンは間もなく大阪に飛行機を飛ばします。この人のことは誰もがこれまで、台湾人意識が非常に濃厚であって、台湾独立支持だろうと思っていたのです。ところがこの間、爆弾宣言をやったんです。中国大陸との三通問題を話さなければ、我々はどうなるかと。その裏をだれも知らないので、彼は李登輝総統と親友であるはずなのに、何で今そんなことを話すのか、と気になって、日本人は一生懸命、その理由を探ろうとしているわけです。

どうして彼がそう宣言したかというと、それは企業家だからです。昨年の統計で台湾から大陸に行った人間は延べ百三十六万人です。今、直通で上海には飛べない、上海に直行したら一時間半で行くんですが、香港経由です。香港もほぼ一時間半かかり、待ち時間が一時間半、それに香港から上海まで一時間半。三倍の時間です。そのために年間にロスする金が日本の金にして、五百億円です。だから、新しい航空会社をつくっている人間としては、台湾から飛ぶんだけれども大変な努力がいる。

皆さん、私が東京に戻ってくるといつも買うワイシャツというのは、気がついたらみんなメイド・イン・

チャイナで、三つ五千円と安いんです。店の人に聞いたら、うちの指導がよくて中国の品質がよくなっているという。今度、台湾に帰って、安い店を見つけて聞いたら、これも大陸製ですと。こういう状況にあるわけです。ボーダレス・エコノミーという問題を日本ではかねていっている、あるいはグローバリゼイションといっている人が、今度は逆に中国は大き過ぎる、国の体をなしていない、分裂させた方がいいといっているんだね。現実の問題として実はボーダレスは進んでいるわけです。そういう状況ですから、それをちゃんと同じ論理の上で理解しないとだめですね。

今、日本で起こっている山一の問題、あるいはビックマネーの問題、それから日米安保協力の新しいガイドラインの問題と、それを一緒に考えに入れて、単なる規制をはずすというだけでなくて、実はソ連崩壊後にアメリカが世界のリーダーシップを握るために、戦略的な暴走の中で単一国際市場をつくり上げようとしていることに思い至る必要があると思うのですが、その警戒心が日本の論壇にほとんど出てきていないですね。

反対してもいいし、賛成してもいいんです。日本がどうあるべきかが基本にあり、その中で台湾を考え、中国を考え、あるいは南北朝鮮を考えるという思考があってしかるべきなのに、何かアメリカが旗を振れば、ビックマネーをやれば、日本はそのままやっていけると思っている。だからある意味では、日本的経営、日本的資本主義という個性は、実は摩滅させられつつあるわけです。いいか悪いかは別ですよ。単一世界市場が成立することが、二十一世紀の人類にとって幸せであるなら、それはそれでいい。ただし、それに対して何も考えないで、ただ日米同盟の中で安住して、国内に米軍基地をたくさん持っていることに、今では日本の皆さんはだれもが麻痺してしまって、当たり前のことだと考えているんです。これまで幸せな、ハッピー

な経済生活ができているのだから、それでもいいだろうとおっしゃるのなら、それならいいんです。だけど、実は無自覚の状況が一番恐ろしい。そこにファシズムの芽が存在するということを、私はここで指摘して終わりにします。